

オブレート会研修会 要約

(2020/10/14, 福岡黙想の家, アベイヤ司教様)

日本でのオブレート会原点

- ・日本での宣教は、神のみ言葉をまだ聴いていない所に、それをもたらすこと。
- ・他の修道会が行かなければ私たちこそが行くべき。
- ・それによって、日本で新たな必要な召命が生まれることを願う。

4人の分かち合い+ジュード文書

■オブレート会員としての今の小教区での働き

- ・小教区を通して、社会の中の色々な方々と出会い、関わるチャンスがある。
- ・小教区は、小さな人々や貧しい方々と出会える窓口である。
- ・小教区内でも、経済状況、社会的地位、教育水準等の理由で多くの差別を感じている貧しく、疎外されている人々がいる。彼らに奉仕すること。
- ・小教区の働きは、信徒を適切に社会に導く方法を与える場所ではないか。

■外国人を日本の教会に統合するための努力

- ・国際ミサ等で、ミサの典礼(朗読や歌等)を多国語で捧げ、交流会を持つ。
- ・バザーや市民フェスタ等の主な活動で、全員が1つの教会として行う。
- ・教区内の言語が話せる司祭(修道者)を呼び、ミサや彼らとの交流に関わってもらう。
- ・その言語が話せる司祭がいる教会に行くことを勧める。
- ・各国(各コミュニティ)代表一人を決め、世話人(連絡、調整)になってもらう。
- ・教会の評議会等に、各国の代表者が参加できるようにする。
- ・外国人は教会に何が出来るか、教会から何をして欲しいかを話し合う。
- ・来られない外国人を教会で待つのではなく、彼らの所に行き、そこでミサを捧げる。
- ・ネットに教会の写真を掲載し、外国人に教会を案内、紹介し、探してもらう。
- ・Facebookを通して外国人と連絡ができるようにする。
- ・ベトナム語の祈りと歌の本を準備。
- ・信徒が日本語を教える。
- ・浴衣パーティーをし、浴衣を着て地元の盆踊りやお祭りに行くよう外国人を誘う。
- ・日本人と外国人と一緒に正月に餅つきをし、交流の場とする。
- ・日本人と外国人と一緒に登山をする。
- ・日本人信徒が個人的に外国人信徒とコミュニケーションをとることを勧め応援する。
- ・教区単位での外国語ミサを捧げる。
- ・外国人に色々な教会行事(成人式、食事会等)に声をかける。
- ・外国人の信徒名簿を作る。
- ・小さい教会は外国人の必要性を感じていて、交わりがよく出来ている。

■この統合過程での困難や障害

- ・日本人は、大いに彼らだけの教会だと思っている。
- ・教会の事務や会計等を外国人にお願いすることは難しい。
- ・外国人は、まだビジター、お客さんという態度がある。
- ・大きい教会はまだ日本人信徒でカバーできるので、外国人の受け入れが難しい。
- ・日本人と外国人がまだバラバラで一致が難しい。
- ・日本の人々はヨーロッパ的教会を求めている。
- ・外国人信徒との関わりには言葉の壁を強く感じる。
- ・外国人信徒は他の教会の英語ミサに行くので、皆との触れ合いがなかなかできない。

■ オブレート会はどのように外国人司牧に積極的に関わられるか

- ・外国人司牧のために働く人がたくさん必要。
- ・開いた心で、外国人司牧のために働く意思を持った人、また準備が出来た人が必要。
- ・船員司牧(船上での英語ミサ)、そこに日本人も参加する
- ・ベトナム人だけでロザリオを祈る場所を司祭館に作った。
- ・オブレートデイというのを作って、国際ミサにし、オブレート会を紹介した。
- ・オブレート会の召命の祈りとロザリオの祈りをベトナム語で作りと、唱えている。
- ・司祭館を外国人の親睦の場(食事、会話)として提供している。
- ・教区の難民移住移動者委員会と共に働く。
- ・外国人司牧に関する行事を教区レベルで作りと、司教様にも関わってもらう。
- ・彼らの近くにおいて、一緒に暮らし、彼らの困難を生きてみて、痛みを感じることに。
- ・創造的な発想の司牧の仕方が必要。いろんなことをやってみる。
- ・外に出て、外国人信徒と触れ合うこと。
- ・入国管理センターの傾聴活動や通訳として奉仕する。

■ 新型コロナの影響

課題

- ・教会内の通常の活動が中止になり、またミサ参加率も 50～60%に減った。
- ・失業や労働時間短縮のため、人々は教会に食料や経済的援助を求めている。
- ・研修生の多くのベトナム人は、解雇され国を離れなければならなかった。
- ・コロナによるストレスにどのように立ち向かうか。
- ・この新しい状況をどのように助け、支援するかを見極める状態に置かれている。
- ・信徒でない外国人にも目を向ける必要性。
- ・(外国人)信徒名簿がないため、コロナの状況で変わる情報を彼らに伝えられない。
- ・ポストパンデミックのやり方はまだ考えていない。

希望

- ・食糧を集めて貧しい人々に配布するプログラムを立ち上げた。
- ・問題に直面したとき、ブラジル人は神を求める。
- ・教会の扉は人々のために開かれ、行く所が限られる中、多くの人が教会を訪れた。
- ・人生について感じていることを話す機会になった。
- ・思いやり、愛情、傾聴は、人生に多くの変化をもたらし、希望を与えた。
- ・この状況は、活発な信徒の意識に大きな変化をもたらした。
- ・実際の状況を知る機会、より深く知る機会、より深く関わる機会を与えられた。
- ・司祭だけが集まって聖週間の典礼、ミサを捧げる機会を得ることができた。
- ・コロナ禍でも外国人信徒には影響がなかった。
- ・Facebook や LINE でミサを配信するという試みを持てた。
- ・「お祭りモードの教会(飲み食い、陽気)」からイエスのメッセージ実践への挑戦へ。
- ・困難、痛み、孤独等、十字架後の希望と復活を伝えられる機会とする。
- ・コロナは実際には挑戦ではなく、機会を利用すれば形を変えた祝福になる。
- ・私たちが真に歩むべき道に気付くとき。
- ・コロナ禍にあって、教会が皆のオアシスになることが大きな希望。

■ その他

司牧

- ・幼稚園司牧は、カトリックや祈りの雰囲気の中で、大切な事を子どもに伝えられる。
- ・職員、子ども、保護者との関わりは、福音宣教の良いチャンスで素晴らしいこと。
- ・ボランティアビューローを通して、ボランティアグループや社会に繋がっている。
- ・色んな宗教(プロテスタントも)の方々と共に刑務所で働き、エキュメニカルの場となっている。
- ・共同体(ホーム)から色々な司牧に出かける。宣教者として派遣を感じる場がある。

今後について

課題

- ・一人で働いていること。共同体を持っていない。
- ・高齢化、人数の減少で、色々な活動や役割、司牧が、今まで頑張ってきたことがこれから出来なくなる。

希望

- ・奉仕しようとする人々、そのように養成された人々がいる。
- ・今回(10月の集い)のように、司牧について皆と話し合えたことはうれしい。
- ・色々な司牧を色々な方法で色々な人々との関わりの中で行っていきける可能性有り。
- ・教区との繋がりの中で、社会問題を知り、向き合っていき、できることを行う。

アベイヤ司教(午前)

■コロナについて

- ・慎重にしなければいけないが、何でもコロナのせいにしてはいけない。
- ・YouTubeのミサに慣れてしまっても困る。
- ・大人数ではできないが、少人数でできる何かを探し行っていくこと。

■修道会共同体

- ・オブレート会という同じカリスマの下、自分たちのことを評価し、分かち合うこと。
- ・喜びあふれる共同生活を証しし、人々がそれに触れることは重要。
- ・総会で出される文書を通して、考えさせられ、問いかけられることを活かす。

■外国人司牧

教会の中の日本と外国

- ・外国人も教会の中で一員であるという自覚を持たせ、評議会に入るように勧める。
- ・日本の教会は組織、規約やマニュアルを大事にし、外国人はそれに違和感を感じる。
- ・その国の典礼、維持費や葬式等の捉え方等、日本信徒の理解が必要。
- ・彼らの国の教会伝統と日本の教会伝統の調和。
- ・教区単位と各小教区単位の外国語ミサとのバランス。
- ・各国の一人のリーダーが必要。
- ・カトリック教会の特徴は一方では一致、他方では多様性。このバランスが大事。

外国人へのカテケージス

- ・ベトナム人は聖体と赦しの秘跡はセット。そこにカテケージスが必要。
- ・ただ、ベトナム帰国後の彼らの生活も考えないといけない。
- ・外国人は宣教者であり、信仰を他者に伝える使命の自覚を持ってもらうよう導く。

外国人への支援

- ・技能実習生は会社との契約が終わると仮放免をもらうが、日本の法律では働けない。
- ・日本に滞在してもいいが働くな、なので、その対策を政府に働きかける必要有り。
- ・同時に、経済的に困っている人を支援する方法を考えること。

アベイヤ司教(午後)

■み言葉(マルコ 2;1-12)から

- ・私たちの考えだけで動かないように、み言葉からの導きも大事。
- ・み言葉から時々、今の教会を考える時にヒントをもらう。
- ・言葉だけでなく生き方、関わり方、教会のあり方を通して、メッセージを与えているか。
- ・人々の心に刺激を与え揺さぶり、質問を起こさせ、預言者的な生き方をしているか。
- ・私たちの考え方ややり方、ルール運営で、人がイエスの所まで行くのを妨げてないか。

- ・時々、屋根をはがしてくれる人が必要ではないか。
- ・それによって今までイエスに近づくことができなかつた人が近づくことができる。
- ・主人公は私ではなく、イエスの注意を引いている(助けを必要としている)者。
- ・色んな社会の問題(悪)の原因を取り除き、解放していく働きが必要。
- ・訪問者を捕まえるのではなく、自分の道を歩めるように無償で導く態度が大事。
- ・あまりにも私たちは屋根に守られ、何でも整えられている。
- ・それに触るな、入りたいなら、ルールを守れという態度ではないか。
- ・人が何かをせっかく求めて来ても、私たちは逆にブレーキをかけていないか。

■ 今後の日本の教会

今とこれから

- ・今の日本の教会のムードは「諦め」。これは良くない。何とかして乗り越えること。
- ・ビジョンが必要。今後、どこに焦点を置き、何を目的とするか。
- ・このビジョンづくりのプロセスに、外国人を含め皆が関わることが大事。
- ・委員会や評議会は、人々を支えていくためにブレーキをかけるためではない。
- ・教会はキリストが中心である。司祭中心でなければ信徒中心でもない。
- ・それぞれ与えられた召し出しを謙虚に受け止め、互いに協力し合い、歩んでいく。
- ・福音的リーダーシップは、力ではなく識別(福音に合っているかどうか)を使う。
- ・多数決ではなく識別で決定する。この福音的リーダーシップの養成は必要。

霊性を深めること

- ・霊性がないと、「諦め」のムードは乗り越えられない。私たち自身も召命に応えられて良かったという喜びが大事。
- ・信仰を持っていて良かったという自覚を、信徒が深め確信するため信徒に同伴する。
- ・カテケージスとは、生活を振り返り、分かち合い、体験を味わい、自分の信仰を深めること。カテキズムはそのための道具に過ぎない。カテケージスを大切にする。
- ・フランシスコ教皇の来日を活かす。
- ・各グループ(聖書分かち合い、入門講座、レジオマリエ)を大事にする。講話や講演ではなく、み言葉を読んで、一人一人の感じていることを分かち合う。
- ・イエスの教えに触れると、自分の置かれてる場で生きていく原動力になる。それらを分かち合いを通して言葉にして確認することが、一番基本的なエクササイズ。
- ・小教区評議会を、み言葉に照らし合わせる。そして私たちの歩みはどうかを話し合う。それをしないと町内会になる。私たちには私たちを導くもの(み言葉)がある。
- ・教会でのグループが昼間だけだと、参加者が限られるので、夜のグループも必要。
- ・ミサで、静かな時間を過ごすこと以上を望んでいない人もいるが、もう一步を踏み出せる人に焦点を合わせて導く。
- ・ミサの準備は典礼だけではない。何を許してもらいたいか(自分の罪、この世の罪も含め)、何を捧げたいか、何を感謝したいか。それらを準備する。
- ・福音化されている人によって社会は福音化される。
- ・福音を今の日本の社会の中で伝えていく望み、必要性を私たちは本当に感じているか、自分は福音化されているかどうかを、自分や信徒に問いかける。

日本教会の決定

- ・1984年に日本の教会、日本の司教団は二つの基本方針を出した。
- ・①キリストの食卓をまだ囲んでない人をキリストの食卓に招く。
- ・②日本の社会を少しでも神様の望んでいる社会に近づかせていくこと。
- ・それを実行しようとした時に、信仰と生活の遊離、社会と教会の遊離に気付いた。
- ・その遊離をどう乗り越えていくか、これがナイス I。そこから出たのが三本柱。
- ・①社会と共に歩む教会②生活を通して育てられる信仰③福音宣教する教会共同体。
- ・生活と信仰は結びついた時に、信仰を持っていて良かったという喜びが生まれる。

- ・人生は色々あるが、私は信仰に救われていると、他者に伝えたい。

青少年宣教司牧

- ・大事であることはわかっているが、どのようにやっていくかがわからない。
- ・誰かが時間をとって実際にやってみることが難しくなっている。
- ・現在青年会は OB 会になっているので、年齢制限(30歳まで)を作った方がいい。
- ・意味のあることを実行すること。遊びだけなら飽きる。

社会問題の関心と関わり

- ・社会を神さまの望んでいる社会に少しでも近づけていくこと。
- ・社会が本当に変わってほしいか、自分の生活がそれを語っているか、それを問う。
- ・社会問題の活動や運動は見えるが、キリスト者としての霊性が見えてこない。
- ・関わる時のモチベーションや霊性は大事。
- ・いろんな活動に携わると自分も育てられる。
- ・頭だけで考えるのではなく、虐げられた人に実際に触れ、出会ってみること。
- ・教育、福祉、医療、公共施設、NGO、NPO、ボランティアグループ、弁護士等、色んなつながり、ネットワーキングができる。

現実(教会、修道会)と今後に対して

- ・負担にならないようにしないといけない。
- ・何かを閉める時は閉める。それは仕方ない。
- ・創造性が必要。創造的にやっていく。
- ・組織や規約を大切にすることはなく、人を大切にすること。
- ・司祭同士、会員同士のつながりは大事。修道会の場合は、お互いが家族である。
- ・神様に対する深い信頼が必要。教会は私たちのものではなく聖霊のもの。
- ・だから自分に与えられた使命を希望を持って地道にやっていくこと。
- ・将来は私たちの超えるところにある。それに信頼する。私たちの手の中にはない。
- ・置かれたところで、人々を支えながら歩むこと。

ブラッドリー(一日のまとめ)

- ・司教様の話の中での二つの言葉。「振り返り」と「識別」。
- ・日本での宣教 70 年の今までの歩みを「振り返り」ながら、コロナ禍や会員が減少する中での今後は「識別」していく。
- ・オプレート会としての我々のビジョンとして、教会内外での難民移住者に重点を置き、一つの場所を選ぶ。それは豊橋。そこにコミュニティを作る。
- ・小教区(教会内外での活動)、幼稚園、これらの担当者をどうサポートしていくか。
- ・この会を通して出たいいくつかのポイントをピックアップして考察する。

ポイント ピック アップ Point Pick Up

振り返り

原点について

- ・日本で、神のみ言葉をまだ聴いていない所に、それをもたらすことができたか。
- ・他の修道会が行かないようなところへ私たちは行ってきたか。
- ・日本で新たな必要な召命が生まれることを心から願っていたか。

み言葉から

- ・言葉だけでなく生き方、関わり方、教会のあり方を通して、メッセージを与えていたか。
- ・人々の心に刺激を与え揺さぶり、質問を起こさせ、預言者的な生き方をしていたか。
- ・我々の考え方やり方、ルール運営で、人がイエスの所へ行くのを妨げてなかったか。
- ・人が何かをせっかく求めて来ても、私たちは逆にブレーキをかけていなかったか。

霊性を深めること

- ・私たち自身、召命に応えられて良かったという喜びを感じていたか。
- ・福音を今の日本の社会の中で伝えていく望み、必要性を本当に感じていたか。
- ・自分は福音化されていたかどうか。

社会問題の関心と関わり

- ・社会が本当に変わってほしいか、自分の生活がそれを語っていたか。

識別

それぞれの司牧

小教区司牧

- ・教会はキリストが中心である。司祭中心でなければ信徒中心でもない。
- ・色んな人々との出会いの場。各々の召し出しを受け止め、互いに協力し合い、歩む。
- ・福音的リーダーシップの養成。
- ・ビジョンづくり。そのプロセスに、外国人を含め皆が関わる。
- ・ナイス I で出された声明を参考にする。
- ・今後、担当する教会を絞っていく。

外国人司牧

- ・外国人を日本の教会に統合するための努力(上記参照)。
- ・外国人へのカテケージス。
- ・オブレート会の召命につなげる。

幼稚園司牧

- ・色んな人々、社会とつながりを持てる場であり、宣教の場でもある。
- ・今後、担当する幼稚園を絞っていく。園長の任命。

青少年司牧

- ・意味のある活動を実行する。

上記の共通、土台になるもの

霊性を深める

- ・対象は信徒だけではなく、自分自身も含めて。
- ・「み言葉の分かち合い」の充実。

コロナの中で

- ・職を失う人々や外国人の支援体制。
- ・ピンチをチャンスに変えていく。

社会に向けて

- ・一歩踏み出して出会ってみる。
- ・ネットワークキングの活用。

共同体のあり方

- ・共同生活の周囲への証し。
- ・同じカリスマの下、自分たちのことを評価し、分かち合う。

ビジョン

- ・上記(振り返り、識別)から見いだされたものをビジョンとする。
- ・豊橋で、色々な可能性のために、共同体作りをする。
- ・社会状況や取り巻く環境の変化が早い(コロナの影響も含め)ので、短期と長期に分けてビジョンを考える。
- ・負担にならないように、何かを終わる(辞める、閉める)時には、終わる決断をする。
- ・未来は私たちではなく、神さまの手にあることに信頼し委ね希望を持つ。